

平成23年5月18日現在

機関番号：23804

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20700507

研究課題名（和文） フランスにおけるメディア・スポーツ文化に関する研究

研究課題名（英文） Study for media sports culture in France

研究代表者 溝口 紀子（MIZOGUCHI NORIKO）

静岡文化芸術大学・文化政策学部・准教授

研究者番号：40343727

研究成果の概要（和文）：

本研究では、フランスのメディア・スポーツ、スポーツ・ジャーナリズムにおける社会的背景や歴史の変遷を明らかにし、商業的な放映権とスポーツ団体の利益を擁護しながらも、「公共放送」の重要性を認め、どのようにメディア・スポーツ文化を構築していったのかを検証した。さらに、フランス人と日本人のメディア・スポーツ関係者による公開シンポジウムを開催することで、公共性やグローバル化の中における現代のメディア・スポーツの実像を明らかにし、メディア・スポーツのアイデンティティやスポーツ・ジャーナリズム、メディア・スポーツ文化について考察した。

研究成果の概要（英文）：

This study clarified a social background and historical transition for media sports and sports journalism in France and reviewed how a media sports culture was constructed with recognition of importance for “Public broadcasting system” while advocating a commercial broadcasting right and interest of sports organization. Furthermore, with holding a public symposium by media sports relevant people of the French and Japanese, the study clarified a real character of the modern media sports in public nature and globalization and examined the identity of media sports, sports journalism, and media sports culture.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	100,000	30,000	130,000
年度			
年度			
総計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：スポーツ科学

科研費の分科・細目：スポーツ科学

キーワード：メディア、スポーツ、フランス、ユニバーサル・アクセス権

1. 研究開始当初の背景

1992年1月、フランスのスポーツとテレビ委員会（La Commission Sport et Television）は、国民の情報への権利とテレビ局の独占放送権との調整を目的とした紳士

協定に基づいて、「スポーツ競技の放送に関する紳士協定」を制定し、スポーツの独占的な放映権のあり方に一定程度枠を設けていたが、研究開始時の当時のフランスのスポーツ市場では、スポーツ放映権料の高騰により

スポーツ自体が持つ公共性やグローバル化の中で意識されてきたユニバーサル・アクセス権などの公共論問題は影を潜めていた。

2. 研究の目的

本研究では、フランスのメディア・スポーツ、スポーツ・ジャーナリズムにおける社会的背景や歴史の変遷を明らかにし、商業的な放映権とスポーツ団体の利益を擁護しながらも、「公共放送」の重要性を認め、どのようにメディア・スポーツ文化を構築していったのかを検証していく。

3. 研究の方法

フランス人と日本人のメディア・スポーツ関係者による公開シンポジウムを開催することで、公共性やグローバル化の中における現代のメディア・スポーツの実像を明らかにし、メディア・スポーツのアイデンティティやスポーツ・ジャーナリズム、メディア・スポーツ文化を明示することが目的である。

4. 研究成果

平成 20 年度報告

初年度は、フランスのメディア・スポーツ、スポーツ・ジャーナリズムにおける社会的背景や歴史の変遷を調査するために、現地フランスにて、平成 20 年 9 月 3 日-24 日フランス研修(パリ・ボルドー)を行いメディア・スポーツの研究の収集を行った。パリでは、レキップ新聞社、ユーロスポーツ社を訪問し、インタビュー調査おこないフランスのメディア・スポーツの概要を明らかにした。また、次年度に開催する、メディア・スポーツシンポジウムのフランス人パネリストとしてレキップ社編集長、ユーロスポーツ社ディレクターに交渉を行った。さらにボルドーにおいて、ボルドー大学教授ミシェル・ブルース教授と研究会を開催した。とくにブルース教授は当時、国際柔道連盟メディア担当であり、「メディア・スポーツ化する柔道の変容」について意見交換をおこなった。現地調査で明らかになったことは、特にスポーツ日刊紙レキップ紙(L'Equipe)と衛星テレビ放送ユーロスポーツ(Eurosport)においてはグローバル化が進む一方で、デジタル化によりメディアの変革が推し進められていた。

フランスのスポーツメディアはデジタル化により新聞市場は減少し、インターネットサイトによる市場が拡大され、有料コンテンツなどの開発を推し進められていた。またメディア・スポーツの公共性については、1992 年 1 月、フランスのスポーツとテレビ委員会(La Commission Sport et Television)は、国民の情報への権利とテレビ局の独占放送権との調整を目的とした紳士協定に基づいて、「スポーツ競技の放送に関する紳士協定」

を 4 原則にまとめ、スポーツの独占的な放映権のあり方に一定程度枠を設けているが、現実のフランスのスポーツ市場では、スポーツ放映権料の高騰によりスポーツと放送の健全な発展が脅かされる事態が生じており、スポーツ自体が持つ公共性やグローバル化の中で意識されてきたユニバーサル・アクセス権などの公共論問題は影を潜めていた。



写真 1 ユーロスポーツ カロウアウズ氏



写真 2、レキップ新聞社編集長イッサエル氏

平成 21 年度報告

(1)「メディア・スポーツシンポジウム グローバル化するスポーツ文化 —ジャーナリズム、メディア・スポーツの将来とは—」をテーマに下記の内容で開催した。

日時 2009 年 8 月 1 日(土) 14 時から 17 時
会場 静岡文化芸術大学 南 176 大講義室及び講堂

参加者 一般市民、スポーツメディア関係者約 300 人

■第 1 部 基調講演時間 14 時から 14 時 40 分

題目「フランスにおけるメディア・スポーツ」
溝口紀子(静岡文化芸術大学国際文化学科准教授)

平成 20 年度文部科学省科学研究費若手研究 B「フランスにおけるメディア・スポーツ文化に関する研究」研究課題番号:20700507 の中間報告を行った。

■第 2 部 パネルディスカッション 15 時か

ら 17 時まで

コーディネーター：溝口紀子 パネリスト：カリム・ベンイスマイル氏 (L' EQUIPE 格闘技編集長)、フロリアン・カロウアズ氏 (EUROSPORTS サッカーディレクター)、西森大氏 (NHK スポーツディレクター)、田村修一氏 (日仏スポーツジャーナリスト) ※フランス語逐次通訳兼パネリスト、河合純一氏 (シドニー、アテネパラリンピック競泳金メダリスト、北京パラリンピック競泳銀メダリスト、静岡県総合教育センター指導主事)

(2) 日本とフランスにおけるメディアの特徴
溝口：まず日本メディアからみるフランスメディアの特徴などお話をください。

河合：日本ではその時のイベントや大会に関する質問というのが一般的ですが、海外メディアでは思いもよらない質問がくるんですね。例えば中国の記者から、「今日は中国では月餅を食べる日ですが、月餅を食べましたか？」と聞かれ、周りの選手と戸惑うことがありました。しかし、場の空気が緩んだりして、親近感を感じ新しい取材方法かとおもいました。

西森：日本選手は政治的な質問をされると避け、「自分たちは自分たちのサッカーをするだけです」とか、「自分は泳ぐだけです」としか答えてくれない。それに対してフランス選手をはじめ、ヨーロッパの選手は自分の意見をメディアに対して言うことができますね。

田村：選手自身の個性がはっきりしていて、ジャーナリストがした質問に対して、ジャーナリストにも意見を求めることがある。明確な意見や言葉をもつことを大切にしてそれに応えられることで対等な関係を築きあげているとおもいます。

溝口：フランスメディアからみる日本メディアの特徴、取材方法や選手の対応の違い等お話しください。

ベンイスマイル：まず驚いたのは、仕事の仕方です。日本メディアのひとは常にグループでみんな一緒に仕事をしている。フランスはそれとはまったく逆なわけです。たしかに仕事が終わった後は、みんなで食事にいきますけど仕事の時は、お互いの競争であり、ある意味戦いであり、誰が最初にスクープをとるか、その為のポジション取りそういうのがすごく大事ですね。ひとつ例をあげると、アテネオリンピックの 100m 決勝のレースが終わった後、私と私の同僚のジャーナリストの二人で金メダルをとった選手のドーピングが終わるのを 2 時間トイレに隠れて待っていました。ようするに彼のインタビューを一番にするために待っていたのです。こんな風にぎりぎりのところで仕事をするわけですね。つまり誰にも得られない情報を読者に提供する。

それはたとえテレビでも得られないような情報を自分たちの読者に提供するためにぎりぎりのところまでやる努力を常にしています。

溝口：フランスのメディアは、スクープに対してのモチベーションがものすごく高いですね。独占スクープをとりたいという思いが本当に強とおもいます。

西森：逆に日本は横並びに意識が強いですね。いわゆる「特落ち」、自分のところだけコメントがうまく取れないことがそうですが、そういうことをすごく恐れますね。だから記者クラブに行き、取れなかった人は周りの記者にお願いして教えてもらいます。そうすると新聞とかにでてくるのが一緒になっちゃうんですね。そういうところから独自性をだしていくか、ある程度みんな同じ土壌でやってそこから少しずつ違いを出していく感じがします。

カロウアズ：4 年前のキリンカップのフィンランド戦の中継で日本に来たのですが、その時日本のメディアに対してすこしおかしと感じたことがありました。試合が終わってまずミックスゾーンというインタビューエリアがあってそこに行くんですが、私も一番よいポジションを確保しようと思い、試合が終わってすぐ言ったわけです。実際一番よいポジションを取り、私の後ろには日本人ジャーナリストがたくさんいました。そのインタビューは宮本選手に対して行ったのですが、そのとき奇妙だとおもったのは、ヨーロッパ、フランスの場合、選手と対等な関係で敬語は使わず話し、そこから深い話をどんどん展開していくのですが、日本選手は常に畏まっています。お互い本音が言えず、話が深まっていけない妙な感じがしました。

ベンイスマイル：西森さん、日本メディアが特落ちを恐れたり、新聞なりテレビなりが同じものを書いたり放送するのに、どうして一般の人は、朝日新聞を選んだり、NHKを選んで観たりするんですか。

西森：この質問は会場にいるみなさんに聞きたいですが、それでも書き手やディレクターの微妙なニュアンスなどはでるとおもうんですね。スポーツの好きな人はそういった微妙な違いを好んで選んでいるのではないかとおもいます。

河合：最近テレビを観ないのであまりいえませんが、スポーツは面白いものはみえますね。今日も朝早く世界水泳をみてきました。また今日インターネットでチェックしたら先に世界水泳の結果が出ていて、全米オープンや女子ゴルフに負けていると感じました。僕は朝の 2 時に起きて放送を楽しみにしていたのですが、平日は仕事をしていますので土日くらはライブで観たいとおもっていたのに。やはりライブで観たかったです。



写真3、メディア・スポーツシンポジウム
2009年8月1日静岡文化芸術大学

平成22年度報告

3年目の本年度は、本研究の最終年度であり、研究報告書の作成を中心に行った。初年度の現地調査、昨年度の国際シンポジウムで、討議されたグローバルな視点からの問題点、今後のメディア・スポーツのあり方についてまとめ、今後の我が国のメディア・スポーツのあり方やスポーツ/ジャーナリズムについて報告書を作成し関係者に配布した。

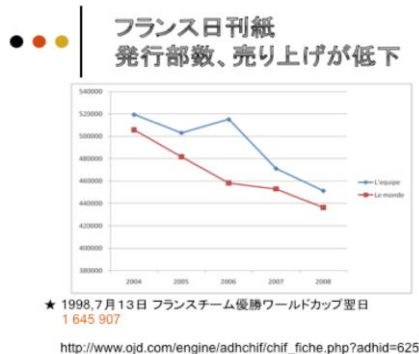


図1、フランス日刊紙の発行部数

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 溝口紀子、「身体文化とメディアの融合と創造-グローバル化するスポーツ文化」静岡文化芸術大学研究紀要 Vol. 10. 75-87
- ② 溝口紀子、「メディアスポーツによる柔道の変容-北京オリンピック大会におけるメディア柔道-」静岡文化芸術大学紀要 Vol. 9. 9-14

〔学会発表〕(計2件)

- スポーツ社会学会(関西大学 2009年3月)
スポーツ社会学会(成蹊大学 2011年3月)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

溝口紀子 (MIZOGUCHI NORIKO)
静岡文化芸術大学・文化政策学部・准教授
研究者番号：40343727